

りに幼稚園での生活を展開できるまでに成長して
いた年長組のある日にS子が示した行動から、S
子の内面で起こっていたこと的一端へ自分なりの
考えを進め、同時に「担任」という立場が抱え
持っている視線の特徴や、感じたり、経験したこ
とを《見直す》行為の必要性について言及した。

言うまでもなく、担任は、大勢の子どもの変化
や成長に同時進行的に立ち合うことになる。集団
を相手にしながらも、個々の日常を丁寧に見つ
め、変化を変化として、成長を成長として感じ取
り、それぞれの子どもと応答を繰り返し、積み重
ねる。その中で、常に、「クラス」という人間関
係の型を意識しながらも、その型において個々の
子どもがそこに慣れ、そこにおいてありのままに
それぞれを表現してくるところで非常に個人的に
関係を結び理解を深めようと努力する。考え込ん
だり、悩んだりしつつも、精一杯生きている子ど

もたちの全存在を認め、ともかくも認め、温かさ
でくろみ込むようにして、見守り、励まし、注意
し、そして、時には厳しく叱る。

*

担任になりたての頃、それは三歳児のクラスで
あったが、降園準備にかかる為に一人ひとりを保
育室へ呼び戻そうとして、私はあちこちをそれこ
そあたふたと駆け回っていた。一人を連れ帰って
くれば、やっと戻ってきていた別のもう一人が出
ていってしまいう
うなそんな三歳の
楽しいひととき。
それでもようやく
ほとんどの子ども
たちを中に入れ、
K
園庭を見ると、



が一人、ジャングルジムのてっぺんに登り、一向にクラスの動きなどにはおかないしに遊んでいた。庭靴に履き替え、Kのところへ私が行き、Kとのやりとりを愉快にも感じながら、連れ戻そうと難儀していると、当時の園長が来て言った。

「あなたにはクラスがあるのでしよう。お行きなさいな。」新米の私がどんなに、手間取り、うろたえ、焦り、まごまごしてやっつていようが、私は終始にこにこと無言で、背後からそつと助けてくれた園長の、この言葉は鮮明に私の心に響いてきた。へクラスへの「担任」ということを改めて自覚した最初であつたと思う。

数年前、Rという強烈な個性に出会つた。飛び抜けて身体が大きく、行動が粗暴で、非常な甘えん坊だつた彼との二年間は、あまたあるクラスの悩みも、成長も、停滞も、涙も、喜びも、感激

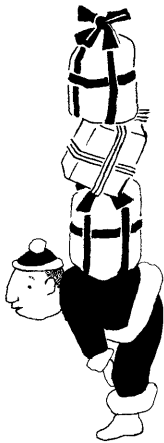
も、Rなしには一日とて語れない日々であつた。

Rの行動は、彼がここからそこへただ移動しただけでも、周りの空気を揺さぶり、そばにいる人や物にぶち当たり、心地よく平和に流れていたそれまでの時間と空間を引き裂かずにはおれない程の、エネルギーとパワーを発散していた。当初の彼は、とにかく世界の至る所、自分の思いに満ち満ちていないと気が済まない傾向があり、その思いのとおりには相手や場面を動かしたので、何かと周りとの衝突が起こり、一旦ぶつかれば、誰一人として（担任さえも）敵う者のいない腕力で、相手を突き飛ばし、ねじ伏せてしまう。または、思いどおりにいかないと、ひっくり返つて泣き喚く。そこら辺にある物にあたる。自分がその一員となつて集団で進めていくべき、生活の流れ（遊びを切り上げて片付ける、お弁当の準備をする、或いは、行事に楽しく参加する……など）

に従うことを嫌がり、拒む。

今でこそ、激しい行動を示していたRの、安心や平衡や秩序を求めて、渦巻き、吹き上げるR自身の内面の叫び、葛藤を、今でもありありと蘇るあの場面この場面を、冷静に捉えることはできない。しかし、当時の自分には、果たしてそれができていたと言えるかどうか。気持ちがあまく興味のあることに辿りつけたとき、一旦取り組み始めると驚く程の集中力でそこに我を没入するRの美しいまでの姿を見、幼稚園に入りたての小さい組の人たちにそつとアリを差し出してやる意外な一面を知ったとしても、そして、Rには、こうやって大人を翻弄し、信頼と安心の手応えを探りながら、求めているがらうまくいかない友だちとの付き合いを何回でも繰り返し重ねていくことがどうしても必要だと実感したとしても、この保育者を抱え込み、引きつけ、振り回し、離さずにはおか

ない子どもの存在に、担任の私は、押し流されそうになっていたに違いない。なぜならば、クラスを見渡せば、遊びが見つからず、心細げに助けを必要としている子どももいれば、友だちとの関係につまずき悩んでいる子どももあり、また、Rと同じように、側にいてくれる大人を待ち焦がれている子どももいたからである。他の子どもたちの様子や気持ち担当である自分の心に飛び込んでくればくるほど、一人の保育者としての力の限界を知らされる。だが一方では、手がかかるからと言って、こんなにも真剣に保育者との関わりを求めている、この一人のひとの《いま》を本気で受



けとめずして、クラスを子どもたちと一緒に作っていくと言えるだろうかという思いもあった。このクラスはまぎれもなくRも含めてこそそのクラスなのだから。こうして、一人の子どもとクラスその他の大勢の子どもたちとの間で引き裂かれる状態を抱えながら、或いは、別のところで進行していた他の深刻な問題にも直面しながら、私は「担任」という役割の現実に向き合わされていた。

同じようなことは、クラスが代わり、クラスを構成する一人ひとりが替わっても、大概同じようにめぐってくる。自分の体力の消耗度こそ違い、Rは、何ら特殊な存在ではなかったがこの頃になって実感される。同じ子どもは一人として存在しないものの、ある特定の場面や状況で示す気持の行き詰まりの類似性や、特徴的な行為の意味に感じる普遍性や、ある危機の次に訪れる変化

の子兆……など、保育のさながらにあって、「この感覚は前にも経験したことがある」と思われる事柄が重なるようになってきた。そして、子どもの自我の成長やアイデンティティの確立に真剣に関わろうとすればするほど、一人ひとりの自我に関わる問題が次々と、或いは、全国の天気分布図のように明滅しては、私の心の中に灯されていない。担任は、その中のどの一つもいい加減にできない代わりに、どの一つにのめり込んでしまっても、クラスは成り立っていかない。

一人の子どもとつきあっているときも、保育者は保育の場の全体の状況を見てとっている。

……

全体の状況を優先させすぎると、抜けがないように見回る保育になって、保育に落ち着きがなくなる。逆に、全体の状況を無視して一人の

子どもにのめりこむと、関係が他の子どもたち
に開かれなくなってしまう。実際の保育はその
中間にある。※

子どもは誰しも特定の大人が継続して温かな配
慮をめぐらせた生活を必要としている。クラス
は、その規模の大小は別として、担任という一人
の大人が複数の子どもたちとその配慮の眼を注ぐ
場であるから、力の限界は避け難い。私も常日
頃、担任とは違ったフリーな立場の保育者や、他
のクラスの保育者に助けられ、支えられている。
先の園長のように「お行きなさいな」とそっと肩
を押してくれることもあれば、さまざま状況や
経過を配慮して、相手の子どもと担任とのつきあ
いを継続させるために、他の子どもたちをみてく
れる場合もある。或いは、私たちは互いに、保育
後の忙しい時間の合間ででも、子どもの話や困っ

ている状態に耳を傾けあうことの大切さを知って
いる。互いが抱えるへ中間への微妙さ、難しさ、
外側からは計り知れない眼に見えない状況がある
ことを知っている。実際、私は、保育のなかで、
数知れず自分の限界を痛感させられてきた。そう
やって、自分の限界に立ち合うことで、また新し
く自分自身を知ることが可能になる。迷い、悩
み、振り返り、考えるそこから、保育者としての
また新たな一歩が始まる。

*

Rとの関わりで
は、私も様々なこと
を経験し、学んだ。
そして、様々な危機
があつた。Rが分か
らない。負担だ、か

